

司馬遼太郎氏が二月十二日に亡くなられて早くも二十五年になります。

山崎正和氏は司馬遼太郎氏の事を評し「人生について嘘をつかず、高をくくらず、独りよがりを生む自己愛を持たず、あまえに通じる自己憐憫（憐愍）をも退けた司馬さんは、その生き方そのものにおいても偉大な人物でした。」と、評価して見えます。天武天皇のお詠に「淑人の、良しと吉見て、好といひし、芳野よく見よ、よき人良く見」と、誰が見ても吉野の桜は美しいように。

「春に植えざれば秋実らず」、春は人事異動や入学、進学等、新しく社会が動くときです。良き種を蒔き、育て、実りを確実のものにして行きましよう。「禍と福とは、門を同じくす。利と害とは隣を為す。」と、言われます。自分の見識を深め、何が福を呼び、何が害を呼ぶのか、見極める力量が求められます。「善悪の報いは、影の形に随うが若し」。善事や悪事に対する報いは、影が形に従うように、必ず現れます。「一死一生乃ち交情を知り、一貧一富乃ち交態を知り、一貴一賤交情乃ち見わる」。良い時には人は集まるが、境遇が変わり悪くなれば、人散じて集まらず。交情の実態とはそんなものです。人生は色々な試練が待ち受けています。身を持って知る事ばかりです。一機一機が良薬と思ひ、一段そして又、一段と、頑張りましよう。ある禪師は「オンニコニコ腹立てまいぞソワカ」と言う真言を作り、称え念じて日日の生活に生かしたそうです。

高田好胤師は修行について「仏教では、水・火・風の三災を、貪・瞋・癡（痴）の三毒にたとえて、貪欲の水・瞋恚の火・愚癡の風（無明の風）、これらの毒素が、私共自身の心の内で、暴れまわり、狂い出すと、一切の善権功德が元も子もなくなってしまう。この猛威から逃れる道は、身・語・意の三業（身体でする行為・言葉による行為・思い巡らす心の行為）の修行につとめて、清浄の光を心に磨くことを措いて、他にありません。それが私達の修行です」と。全ての災の元は煩惱にあると言っても過言ではありません。

令和二年の出生が最小の八十七万人だそうです。少子化が引き起こす問題も国民の関心が薄いようです。昔は、黙っていても、八歳で小学校に入学する事になっていました。今は、満年で数えるのが常識になっています。坊さんは、人が亡くなると必ず数えて享年〇〇歳と書きます。あたりまえの事です。母体に宿った時が此の世に生命を受けた日です。妊娠すれば日一日と体内で胎児は成長をしているのです。ゼロ歳なんて歳はありません。出生したら一歳です。腹の中に居る時は死んで、出たら生きたのかい、おもちゃじゃございません。神秘的なものです。母親なら体内にいる十月十日を胎児が無事に過ごし、安らかに生まれてくることを、心配しながら腹を撫でて見えるでしょう。胎児安泰を祈り、祈願される方も大勢みえます。生命の神秘、尊厳を見つめ直しても良いかと思ひます。年改まる時、即ち、正月が来れば一つ歳を重ねる事に成る訳です。私達は先祖の供養を日課の事としています。答礼の積み重ねは年月を忘れさせます。有難いことです。毎日の精進が、得難い事を生みます。今月は二十一日に彼岸供養を厳修します。